

KṢATRA-DHARMA (下)

—古代インドの武士道—

原 実

東洋学報

II. 1.

既述の如く平時に在つて武士階級は人民守護、社会秩序の維持を義務としたが、武士道の本領が示されたのはむしろ戦場に於いてであつた。戦場に馳せ参づるは武士の本懐、名誉の戦死を遂げるは武士の本望といわれる如く、武士道の精華は就中戦時、戦場に在つて顕著に發揮せられた。この種の諸問題を以下に考察して行くであろうが、それに先立つて戦争と武士との関係、戦争が彼らによつて如何に考えられていたかをみるのが解説の順序と思われる。

既にみた如く武士は戦争を生業とするものであつたが、この他武士を型取る章句として「戦争によつて生きる者 (yuddhena jivikā 7. 50. 62, 14. 2. 16)」⁽¹⁾「武器によつて生きる者 (śastra-jīvin 7. 54. 32)」⁽²⁾が見出され、武士道は「常に武器と共に在り (śastra-nitya 12.22.5)」⁽³⁾といわれる。蓋し戦争は無名戦士・勇士を問わざ、天と約し、名誉を齎し、身体のみならず過去の罪障一切を払う所以であつた。

teṣām antakaram yuddhaṁ deha-pāpma-praṇāśanam
śūdra-viṭ-kṣatra-vīraṇām dharmyām svargyām yaśaskaram (8.32.18)
彼ら奴隸、人民、武士に功徳あり、天を約し、名誉を齎し、身体と罪障を滅する必死の戦 (始まり)⁽⁴⁾。

四階級の義務列举の間にもいわれる。

karma śūdre kṛṣṇe vaiśye samgrāmaḥ kṣatriye smṛtaḥ
brahmačaryām tapo mantrāḥ satyām ca brāhmaṇe sadā (3.198.24)
Śūdra に奉仕、Vaiśya に農耕、武士に戦闘（が義務なり）と伝えらる。梵行、苦行、祭咒、不妄語は常にパラモンに（規定されて）あり。

されば戦わざる武士は武士の名に値しない。

bhūmir etau nigarati sarpo bilaśayān iva

rājānam cāpy ayoddhāram brāhmaṇam cāpravāsinam (13.36.16)

蛇が穴に棲息する動物を呑む如く、大地は戦わざる武士と遊学せざるバラモンの二つを呑む。

kṣatriyasya tu dharmo 'yam yad yuddham bhṛgunandana

svādhyāyo vrata-caryā ca brāhmaṇānām param dhanam (5.186.11)

武士の義務は戦に在り、バラモンの財は自学自修・誓戒の実践に在り。

武士は斯く戦闘従事を義務となし、その本来の姿とする⁽⁵⁾。併し斯く義務として規定される以前に、戦争は彼らにとつて何よりの生き甲斐であり、又武士にとつて戦争以上のものは存在しなかつた。

親族長上を敵軍中にみて戦意怯む Arjuna に Kṛṣṇa は励ましてい
う。

svadharmam api cāvekṣya na vikampitum arhasi

dharma-yadd hi yuddhāc chreyo 'nyat kṣatriyasya na vidyate (6.24.31)

自己の本務に思いを致せ。怯むこと勿れ。蓋し聖戦より卓れたるもの武士にとつてあることなし。

重傷の床に臥して Bhīṣma は Karṇa に諭す。

yudhyasva mirahāṃkāro bala-vīrya-vyapāśrayah

dharma hi yuddhāc chreyo 'nyat kṣatriyasya na vidyate (6.117.32)

私心を去つて只管武力・武勇に拋り戦うべし。戦争より卓れたるもの (dharma), 武士にとつて他にあることなし。

怯む Duryodhana を Karṇa は励ましていう。

na yuddha-dharmāc chreyān vai panthā rājendra vidyate

yam samāśritya yudhyante kṣatriyāḥ kṣatriyāśabha (9.3.10)

それに拋りて諸々の武士の戦場に身を挺す、戦の道 (dharma) より卓れたる道 (path) あることなし。

決戦を決意する Rāma は猿軍にいう。

lakṣmaṇam parivāryaivam tiṣṭhadhvam vānarottamāḥ

parākramasya kālo 'yam saṃprāpto me cirepsitāḥ (R. 6.100.46)

pāpātmāyam daśagrīvo vadhyatām pāpa-niścayaḥ

kāṅkṣitām cātakasyeva gharmānte megha-darśanam (6.100.47)

Lakṣmaṇa を守れ。吾の久しく待ちわびたる決戦の時今到る。悪性惡意の Rāvaṇa を殺すべし。(雨季を待ちわびる) Cātaka 鳥の夏の終りに雲の出現をみる如く(今われ敵将にまみゆ)。

斯く武士の生甲斐は戦争に在り、戦争は彼らの義務とされたが、然らば戦争に臨んで具体的に彼らは何をすべきであつたか。答は明瞭であつた。彼らは只管敵を殺すべきであつた。辱しめを受けた Draupadi は夫 Bhīma に Kīcaka を殺して恨みを晴らしてくれといふ。

vadatāṁ varṇa-dharmāṁ ca brāhmaṇānāṁ hi me śrutam
kṣatriyasya sādā dharmo nānyāḥ śatru-nibarhaṇāt (4.20.28)

四姓の道(義務)を説くバラモンの口より妾は聞けり。武士にとり、常に敵を殺すより他履むべき道なしと。

腑甲斐なく敗れて帰つた息子 Saṃjaya に気丈の母は叱咤する。

jahi śatrūn rāṇe rājan svadharmam anupālaya
mā tvā paśyet sukṛpanām śatruḥ śrīmān kāda cana (5.132.30)

戦場に敵を殺せ。自己の本務を守れ。勝ち誇る敵が汝を憐れみの眼もて眺むること、ゆめあること勿れ。

ここに敵を殺すことは武士の本務であるといわれる。

併し若し敵・味方と分かれて両軍共々戦争を最大の生き甲斐とし、敵を殺すを以つて最上の義務とするならば、武士には戦に臨んだ上は敵を殺すか、敵に殺されるかの何れしか残されないこととなる。その意味で戦争は「生命の賭(prāṇa-dyūta-pana)」⁽⁶⁾と称せられる。

ātmānaṁ vā parityajya śatrūn vā vinipātya vai
ato 'nyena prakāreṇa śāntir asya kuto bhavet (5.133.14)

自らを捨てるか、敵を斃すか。これより他のあり方により戦に臨む武士の心に平静あり得べきや⁽⁷⁾。

avadhaś cāpi śatrūṇām adharmaḥ śisyate 'rjuna
kṣatriyasya hy ayam dharmo hanyādd hanyeta vā punaḥ (7.168.36)
敵を殺さずんば道に悖ることとならん。武士の道は蓋し殺すか、殺されるか(の何れか)なれば

決戦に臨む Rāma は猿軍にいう。

asmin muhūrte na cirāt satyam̄ pratiśrnomi vah

arāvaṇam arāmam vā jagad drakṣyatha vānarāḥ (R.6.100.48)

吾今汝らに誓う。程なく汝ら Rāvaṇa (敵) なき世界か, Rāma (吾) なき世界か, 何れかを見ん。

因みにこの殺すか, 殺されるかの二者択一の道以外の第三の道は逃走ということになるが, 戦の庭に背を向けて逃走することは武士道を捨てたのであつた。この逃走については後に一括して論ずるであろう。

斯く互いに殺すを以つて旨とすれば, 戦場に在つて勝敗の数は不定となる道理である。「生命の賭」の結末は武勇神 Indra もこれを知るところでなかつた。

dvividham karma śūrāṇāṁ yuddhe jaya-parājayau

tau cāpy anityau rādheyā vāsavasyāpi yudhyataḥ (7.123.9)

戦闘に在つて勇士の所行は二つ, 勝つか負けるか。戦に臨む Indra にもこの二は定かならざりし。

naikānta-vijayo yuddhe bhūta-pūrvah kadā cana

parair vā hanyate vīrah parān vā hanti samyuge (6.109.17)

勝利の数は曾て測り知れず。合戦に在つて勇者は敵に殺されるか, 敵を殺すかの何れかなければ⁽⁸⁾。

勝敗の数は斯く不定とあれば, 武士は勝敗を度外視して⁽⁹⁾決死の覚悟で戦に臨むより以外に道はない。命ある限り彼らは戦うのである。

aham eva dhanuś-pāṇīr goptā samara-mūrdhani

yāvat prāṇān dhariṣyāmi tāvad yotsye niśācariḥ (1.19.5)

弓を手にして戦の第一線に吾一人護らん。命ある限り吾羅刹と戦わん。

戦場に馳せる武士は梓弓, 海に到つた川の再び戻らざるが如くといわれる⁽¹⁰⁾

ye gatāḥ pāṇḍavām yuddhe krodhāmarṣa-samanvitāḥ

te 'dyāpi na nivartante sindhavāḥ sāgarād iva (7.76.3)

忿怒と血気にはやり戦に Pāṇḍu の子に歯向う武士達は今や帰らず, 川の海より戻ろざる如⁽¹¹⁾。

大史詩の戦争の諸卷には「死を退却の場となして」(mrtyum kṛtvā nivartanam) の句が繰返し現われ, 定型句の一つとなつてゐる⁽¹²⁾。

斯くの如く戦に臨む武士にとつて敵を殺すか、敵に殺されるかの二者択一の道しか残されていないとすれば、敵を殺することはそのまま勝利を得ることと同じことになる。彼らにとつて勝つか負けるかではなく、勝つか死ぬか、勝利者となるか、戦場の華と散るかの何れか一方しかなかつた。Samśaptaka と Arjuna の激戦に在つて次の如くいわれる。

tataḥ samśaptakā bhūyaḥ parivavrur dhanamjayam
martavyam iti niścītya jayaṁ vāpi nivartanam (8.37.37)

彼らは今一度 Arjuna を包囲せり。死を決し、或いは勝利を退却の場となして。

同様に Rāmāyaṇa, Rāvaṇa の王子達の出陣時。

śaradabhra-pratikāśā hamsāvalir ivāmbare
marañam vāpi niścītya śatrūṇām vā parājayam (R. 6.69.36)

秋の白雲にも似、又天かけるハンサの列にも似、彼らは死か敵制覇か（の何れか一）を決意して。

上にみた如く戦争は武士の義務と規定されたが、斯く決死の覚悟をきめて戦いに臨むことが彼らの無上の生き甲斐とされた所以はどこに在つたか。勝か死かの何れか一つとなる時、勝利はともかくとして勇敢な武士の「戦死」にも相応の意味が賦与されねばならないこととなる。後に詳述する如く、古代インドの武士道の場合には戦死者の世界が様々に描かれるが、名誉の戦死を遂げた勇士は天女の来迎を受けて天界に到るといわれた。何れは死すべき一生を有意義な形で終結せんとする意識はもとより無常觀・来世觀を背景としているが、戦死を以つて死に方の極致ここに極まるとすれば、武士の戦死=天界享受はそれ相応の意味を得る。従つて既述の二者択一の中、勝てば大地を得、戦死すれば天を得ることとなり、その何れを取るも武士の幸は約束せられていた。即ち武人が戦争を最高の生き甲斐とした所以のものは実に生き永らえれば大地を得、死すれば天を得るという、何れに転ぶも福樂あり

とした点に在る。この点を立証するために次下に文献の証拠を列挙するであろう。

Duryodhana 戦死して、悲しむ老王に Vidura の言、

hato 'pi labhate svargam hatvā ca labhate yaśah
ubhayam no bahu-guṇam nāsti niṣphalatā rāṇe (11.2.9)

殺さるとも天を得、殺せば名誉⁽¹³⁾を得。何れ(に転ぶ)も大なる福徳あり。

戦に空しきことなし。

Pāṇḍu 王子の大攻勢に怯む味方の軍勢を激励して Duryodhana はいいう。

śreyo no bhīmasenasya kruddhasya pramukhe sthitam
sukhaḥ sāmgrāmiko mr̥tyuh kṣatra-dharmena yudhyatām
jītveha sukham āpnoti hataḥ pretya mahat phalam (9.18.60)

怒れる Bhīma の面前に立ち向うは卓る。武士道に則つて戦う者の、戦に死すは快し。生き永らえれば地上に幸を得、殺されれば死して大なる果を享く。

Drona 殺害を唆かす Yudhiṣṭhīra の激励。

kṣatra-dharmaṁ puraskṛtya sarva eva gata-jvarāḥ
jayanto vadhyamānā vā gatim iṣṭāṁ gamiṣyatha (7.164.51)
jītvā ca bahubhir yajñair yakṣyadhvam bhūri-dakṣiṇaiḥ
hata vā devasād bhūtvā lokān prāpsyatha puṣkalān (7.164.52)

皆の者、武士道を先として憂いの影を払い、勝つも討たるるも望ましき帰趣に赴くべし。勝てば布施豊かな祭式を数多行うべし、死すれば神となり卓れた世界と享けよ。

Arjuna との一騎打に臨まんとする Karṇa を励まし Śalya はいいう。

sa tvam puruṣa-śārdūla pauruṣe mahati sthitāḥ
kṣatra-dharmaṁ puraskṛtya pratyudyāhi dhananjayam (8.62.13)
bhāro hi dhārtarāṣṭreṇa tvayi sarvāḥ samarpitāḥ
tam udvaha mahābāho yathāśakti yathābalam
jaye syād vipulā kīrtir dhruvāḥ svargaḥ parājaye (8.62.14)

今や汝は勇気をふりしぶり、武士道を先として Arjuna を迎え撃て。わが軍の一切の運命汝に懸る。力の限りこの重責果せ。勝てば大なる名誉あり、討たれれば必ず天界あり。

ここに天界とは英靈集うところ、彼らは軍神となつたのである。併

しこの天界は勝者にも開放せられ、 勝者も亦暫し生き 永らえて天界に到つた。敗残の息子 Samjaya を叱咤して母 Vidurā はいう。

東

yuddhāya kṣatriyah srṣṭah samjayeha jayāya ca
krūrāya karmane nityam prajānām paripālane
jayan vā vadhyamāno vā prāpnotīndra-salokatām (5.133.11)
武人は戦の為、又勝利のために創造せられたり。彼は常に残酷な所行と人民守護に従事す、勝つも討たるるも彼はインドラの世界を享く。

学

報

斯くて勝つも討たれるも 時間の差こそあれ、 勇士には天界が約束されていたとすれば、 要は戦争に在つて勝敗を度外視し、 生命を賭けて勇敢に戦うのが肝腎であつた。されば戦死は天への近道、 戦闘より卓れた天への道はなしといわれる。

na yuddha-dharmāc chreyān vai panthāḥ svargasya kauravāḥ
acireṇa jitāml lokān hato yuddhe samaśnute (9.18.61)
戦の道より卓れたる天への道なし。戦に討たれ、忽ち（勇士は自ら）獲ち得た世界を享く。

斯くの如く勝利・戦死の何れを取るも宜く、 前者に地上、 後者に天上の幸が約束され、 戦死にはそれ相応の、 否勝利にも勝る意義が賦与せられていた。後に触れる「退却」は武士道を捨てる所以、 地国への道と対照する時、 吾々はここに戦に臨んだ上は生命を顧みず、 勇敢に戦うのが武士道の要諦であつたことを知る。

上に吾々は「勝利」との対蹠に於いて 戦死を考察したが、 戦死そのものの意義を詳説する前にこれと 対蹠される武士の恥すべき死に方を一瞥することが、 就中武士道理解の上に興味あることと思われる。

既述の如く武士は戦場に潔く散るを旨としたから、 家に在つて親族号泣する中に息をひきとる如きは大丈夫の恥とするところであつた。大戦の将に初まらんとする時 Bhīṣma は全軍の將士に戦陣訓を授けるが、 その中に次の如くいわれる。

adharmaḥ kṣatriyasyaiṣa yad vyādhi-maraṇam gr̥he
yad ājau nidhanam yāti so 'syā dharmāḥ sanātanaḥ (6.17.11)

第五十一卷

四五〇

家に在つて病死する如きは武士の道に非ず。戦の庭に斃るること永遠の道なり。

Kṛpa の勧めを断固斥け、戦に向わんとする Duryodhana は次の如く誓う。

gṛhe yat kṣatriyasyāpi nidhanam tad vigarhitam
adharmaḥ sumahān esa yac chayyā-maraṇam gṛhe (9.4.30)

aranye yo vimuñceta samgrāme vā tanum naraḥ
kratūn āhṛtya mahato mahimānam sa gacchati (31)

kṛpaṇam vilapann ārto jarayābhipariplutaḥ

mriyate rudatām madhye jñātinām na sa pūruṣaḥ (32)

武士が家に在つて死するは軽蔑せらる。家に在り、床の上に息をひきとる如きは(武士の)道に悖るも甚だしき。大なる祭祀を数多行つて後森に朽ち果てるか、然らずんば戦に命を捨てし。斯くて彼は栄光に達す。老いにうき身をやつし、苦しみ嘆き、親族号泣する間に息をひきとる如き、そは男に非ず。

Bhiṣma の Yudhiṣṭhira への教訓中にもいわれる。

adharmaḥ kṣatriyasyaiṣa yac chayyā-maraṇam bhavet
visṛjañ śleṣma-pittāni kṛpaṇam paridevayan (12.98.23)

avikṣatena dehena pralayam yo 'dhigacchati

kṣatriyo nāsyā tat karma praśamsanti purāvidah (12.98.24)

na gṛhe maraṇam tāta kṣatriyāṇām praśasyate

śauṭīrāṇām aśauṭīram adharmyam kṛpaṇam ca tat (12.98.25)

idam duḥkham aho kaṣṭam pāpiya iti niṣṭanan

pratidhvasta-mukhaḥ pūtir amātyān bahu śocayan (12.98.26)

arogāṇām spr̥hayate muhur mṛtyum apīcchati

viro dṛpto 'bhīmān ca nedṛśam mṛtyum arhati (12.98.27)

rāneṣu kadanaṁ kṛtvā jñātibhiḥ parivāritaḥ

tīkṣṇaiḥ śastraiḥ suvikliṣṭaiḥ kṣatriyo mṛtyum arhati (12.98.28)

粘液分泌なし、苦しみ喘ぎ、床にあつて死するは武士の道に非ず。武士にして身体無傷のまま往生遂ぐる如き、その所業を古より人士貴ばず。武士が家に在つて死するは讀えられず。誇高き者が己を卑めるは道に非ず、又慘めなり。「苦し、痛し、かなわぬ」など口走り、面を伏せて悪臭放ち、重臣を惱ませ、健康人を羨み、痛みなき大往生を願う如き、斯る(女々しき)死様は、誇高く己れを貴しとなす武士に適わしからず。戦に敵を殲滅し、親族のとめるを振り切つて、銛き武器に傷ついて武士は死するを可とす。

斯く武士は家に死するを恥としたが⁽¹⁴⁾、上の例にもみた如く身体無傷である事も彼らの恥としたところであつた。ここに「名誉の負傷」の概念を一瞥するであろう。

勇士は負傷を物ともせず戦う。彼らは負傷の数丈けの不滅の天界を得、傷口より滴る血潮は以前の罪障を洗い、負傷の苦痛に耐えるは最上の苦行(tapas)であつた。Yudhiṣṭhiraへの訓戒の中で Bhīṣma はいう。

brāhmaṇārthe samutpanne yo 'bhiniḥṣṭya yudhyate
ātmānam yūpam ucchritya sa yajño 'nanta-dakṣināḥ (12.98.10)
tasya yāvanti śastrāṇī tvacām bhindanti samyuge
tāvataḥ so 'snute lokān sarva-kāma-duho 'kṣayān (12.98.12)
na tasya rudhiram gātrād āvedhebhyah pravartate
sa ha tenaiva raktena sarva-pāpaih pramucyate (12.98.13)
yāni duḥkhāṇi sahate vranānām abhitāpane
na tato 'sti tapo bhūyo iti dharma-video viduh (12.98.14)

バラモンの為に一旦緩急ある時、敢然立つて戦い、自己を人柱(祭柱)として立てるは布施無限なる祭祀たり。……戦に在つて(敵の)武器がその皮膚を破りし数丈け、その数丈けの如意にして、不壊なる世界を彼は享く。その身体より流れ出る血潮は(ひとりその)傷口より出づるに非ず。彼は実にその血により一切罪障より解放せらる。傷口の痛みに耐えるより大なる苦行なしとは、道を知る人の説くところなり。

Bhīṣma は更に続けていう。

śūro hi satya-manyubhyām āviṣṭo yudhyate bhīṣam
kṛtyamānānī gātrāṇī parair naivāvabudhyate (12.98.29)
sa saṃkhye nidhanām prāpya praśastām loka-pūjitar
svadharmaṁ vipulam prāpya śakrasyaiti salokatām (12.98.30)

蓋し真実(誓)と激情(怒)に馳られて勇士は勇敢に戦う。彼は負傷をものとせず。彼は世人の讚え貴ぶ戦死と遂げ、己が本分を全うして Indra の世界に到る。

斯く武士は負傷をものとせず、むしろこれを誇としたから、負傷の手当には顧慮するところがなかつた。矢面に斃れた Bhīṣma は医者を拒否し、武士の名誉を重んじて從容死に就かんとした。

evaṁ gate na hīdānīm vaidyaiḥ kāryam ihāsti me
 kṣatra-dharma-praśastāṁ hi prāpto 'smi paramāṁ gatim (6.115.53)
 naiṣa dharmo mahīpalāḥ śara-talpagatasya me
 etair eva śaraiś cāhaṁ dagdhavyo 'nte narādhipāḥ (6.115.54)
 事ここに到りし今、吾に医者の要なし。武士道の讀える最高帰趣に達したれば。矢の床に臥したる吾に（医を用いんとは）これ道に非ず。これら矢に焼かれむしろ吾死に就かん。

斯く負傷を以つて名誉とし、無傷のまま家に在つて病の床に息をひきとるを潔しとしなかつた武士にとつて、然らば彼らに適わしき死の床は如何なるものであつたであろうか。既に吾々は大地が王・武士の妻であるといわれているのをみたが、武士は須く大地をかき抱き、大地に臥すべきであつた。

ghaṭamānā mad-arthe 'smin hatāḥ śūrā janādhipāḥ
 śerate lohitāktāngāḥ pṛthivyāṁ śara-vikṣatāḥ (9.4.37)
 吾（Duryodhana）のために、彼ら勇士・諸侯は戦つて（敵の）矢に斃れ、朱に染つて大地に臥す。

娘孫 Abhimanyu の最期を訊ねる Vasudeva の言。

kaccin na vikṛto bālo droma-karṇa-kṛpādibhiḥ
 dharan̄yāṁ nihataḥ śete tan mamācakṣva keśava (14.60.13)
 （敵の名将）Droma, Karṇa, Kṛpa その他を前にして若者は怯むことなく、討たれて大地に臥せしや。仔細を語れ、Keśava よ。

戦争の大団円、Yudhiṣṭhira と池に隠れた Duryodhana との会話。

彼は怯む敵将に向つて詰問する。

asmān vā tvam parājitya praśādhi pṛthivīm imām
 atha vā nihato 'smābhīr bhūmau svapsyasi bhārata (9.30.33)
 汝は吾らを討つて大地を統べよ。然らずんば吾らの手にかかり大地に眠るべし。

武士にとつて勝か死か、二者の何れかしかなかつたから、「汝大地に臥さん」とは必殺の誓にみえる。

yuddhyasva yadi śūro 'si muhūrtam tiṣṭha rāvaṇa

śayiṣyase hato bhūmau yathā pūrvam̄ kharas tathā (R.3.48.22,3.49.25)
汝勇士なれば、いざ立て、一戦交えん。曾て Khara を吾討ちし如く、汝も討たれて大地に臥さん。

家に在つて病床に臥するに対し、斯く戦の庭に在り、朱に染つて大地に臥するは「英雄の床（vīra-śayana）⁽¹⁵⁾」に伏す所以であつた。戦死せる Śalya, Bhīṣma は次の如く描かれる。

śalyam̄ śaraṇadam̄ śūram̄ paśyainam̄ ratha-sattamam
śayānam̄ vīra-śayane śarair viśakalikṛtam (11.23.9)

見よ、頼りとする勇士、大丈夫 Śalya の矢に傷つき、英雄の床に臥せるを。

śayānam̄ vīra-śayane dadarśa nṛpatis tataḥ

tato rathād avārohad bhrāṭbhīḥ saha dharmarāṭ (13.153.15)

義務を守る王 (Yudhiṣṭhira) は英雄の床に臥せる Bhīṣma をみて弟共々車より降りる。

「英雄の床」に臥せる敵将に勇士は車を降りて敬意を払うが、この「英雄の床」は又「矢の床⁽¹⁶⁾」とも称せられ⁽¹⁷⁾、これに勇士侍るともいわれる。医者を拒否して從容死に就かんとする Bhīṣma を描いて二句。

śara-talpa-gataṁ vīram̄ dharme devāpinā samam
śayānam̄ vīra-śayane paśya śūra-niṣevite (11.23.17)

見よ、義に於いて Devāpin に等しき英雄の、矢の床に在り、英雄の床に勇者に侍づかれて臥すを。

tato yudhiṣṭhīro rājā śara-talpe pitāmaham
punar eva mahātejāḥ papraccha dadatām varam (13.115.1)

それより Yudhiṣṭhīra は矢の床に、布施行第一の祖父を訊ねて曰く。

以上吾々は武士の「死の床」を巡つて論述を進め、親族見守る病床よりは、大地をかき抱く英雄の床、矢の床が武士の選ぶところとなつてゐるのをみ、名譽の負傷の概念に關説してこれらに武士道精神の横溢しているのをみたが、ここで再び吾々は「戦死」の問題に立ち帰ることとするであろう。

戦死は唯單に武士の本懐たるに留まらず、武士に定められた義務と

称せられる。勇敢に戦う事が義務づけられていたとすれば、戦死が武士の義務とされるのも亦当然の帰結である。

brāhmaṇānāṁ tapas-tyāgaḥ pretya-dharma-vidhiḥ smṛtaḥ
kṣatriyānāṁ ca vihitam samgrāme nidhanaṁ vibho (12.22.4)

バラモンには苦行と無欲が（義務なりと）伝えられる、死後もこの義務は守らるべき（死者の供養？）。武士には戦場の華と散ることが（義務として）規定せらる。

原 さきに名誉の負傷の文脈にみた如く、戦死は世人の讚え、貴ぶところ (loka-pūjita 12.98.30) であつたが、戦死者に善人達は敬意を表する。

eṣa mukhyatamo dharmaḥ kṣatriyasyeti naḥ śrutam
yad ājau nihataḥ śete sadbhīḥ samabhipūjitaḥ (8.27.92)

戦に討たれて斃れ、善人達に尊崇せられるは武士の最高の道なりと吾ら伝え聞く。

のみならず戦死は聖仙の称揚するところであつた。臨終の際の Duryodhana に Aśvatthāman はいいう。

yāṁ gatim kṣatriyasyāhuḥ praśastāṁ parmarṣayaḥ
hatasyābhimukhasyājau prāptas tvam asi tāṁ gatim (10.9.28)

今汝は戦闘に勇敢に戦つて斃れ、聖仙達の讚えし武士の帰趣に到れり。

戦死は又武士に生れ、名門に生を享けた武士に適しき死に方といわれ、家名に誉あらしむる所以とされ、英雄の望むところといわれる。

Abhimanyu 死し Kṛṣṇa はその母 Subhadrā を慰めていいう。

kule jātasya vīrasya kṣatriyasya viśeṣataḥ
sadṛśām maraṇām hy etat tava putrasya mā śucaḥ (7.54.13)

diśyā mahā-ratho vīraḥ pitus tulya-parākramāḥ

kṣatrena vidhinā prāpto vīrabhilaśitāṁ gatim (7.54.14)

汝の息子のこの死（に方）は蓋し名門に生を享けたる勇士、就中武士に適わしきものなれば、悲しむ勿れ。その勇気父に等しき大丈夫、勇士の武士の道に則つて英雄の望む帰趣に赴くは幸なる哉。

斯く戦死は榮誉とせられるから、その功徳に到つては祭式も苦行も将又学問もこれに遠く及ばぬところであつた。

na yajñair dakṣiṇāvadbhir na tapobhir na vidyayā
svargam yānti tathā martyā yathā śūrā rane hatāḥ (11.2.11)

布施豊かな祭式によるも、苦行によるも、又学問によるも、戦の庭に斃れし
勇士程には人は天界に赴くことなし。

又 Arjuna は武士道を称揚してい。 東洋

kṣatriyāṇāṁ mahārāja samgrāme nidhanaṁ smṛtam
viśiṣṭam bahubhir yajñaiḥ kṣatra-dharmam anusmara (12.22.3)

武士の戦に斃れるは数多の祭式より卓れたりと伝えらる。武士道に思いを致せ。

後に述べる如く 戦死者は死して種々の天界を享けるが、 戦死は又現世にも死して名を留むる効験を有した。息子達の死を耳にし、 戦死にせめてもの慰めを見出さんとする Dhṛtarāṣṭra の述懐。

kṣatriyāḥ kṣatra-dharmeṇa vadhyante yadi samiyuge
vīra-lokaṁ samāśādyā sukham prāpsyanti kevalam (6.3.45)

iha kīrtim pare loke dīrgha-kālam mahat sukham

prāpsyanti puruṣa-vyāghrāḥ prānāṁs tyaktvā mahāhave (6.3.46)

武士道に則り戦に斃れなば、武士は英雄の世界に到り、只管幸せを享けん。
大戦に命を捨て勇士はこの世に永く名誉を留め、あの世に大安を得ん。

さきに吾々は戦争が身体のみならず、罪障を滅する所以といわれ、
戦争に宗教的な意味合いの漂うのをみたが、戦死はこの意味で天界に到るための潔めであつた。叙事詩にあつて「戦死」を「武器によつて淨められた」(śastra-pūta) ものとなす章句が散見する。もと武士は「武器に由つて生き」(śastra-jīvin) 「武器と常に共に在る」(śastra-nitya) ものであつたが、その名誉ある終結は斯く「武器によつて淨められた」のである。Arjuna は Yudhiṣṭhīra を励ましてい。

mā tvam evaṅgate kiṃcit kṣatriyarṣabha śocithāḥ
gatāḥ te kṣatra-dharmeṇa śastra-pūtāḥ parāṇ gatim (12.22.14)

事ここに到つて嘆き給う勿れ。彼らは武士道に則り、武器に淨められ、最高の帰趣に赴けり。

ここに最高の帰趣とは天界のことである。Dhṛtarāṣṭra の息子達は斯くて天界に到つた。

東

洋

学

報

dhṛtarāṣṭrātmajāḥ sarve yātudhānā balotkaṭāḥ
ṛddhimanto mahātmānaḥ śastra-pūtā divam gatāḥ (18.5.19a-d)

……偉大なる Dhṛtarāṣṭra の子らは悉く禰栄え、武器に淨められ、天界に赴けり……

後述する如く戦死者の赴く世界は様々に述べられるが、天界は又「武器によつて淨められた世界」であつた。斯くて「武器によつて淨められたる」者は「武器によつて淨められた」帰趣に達したのである。

Abhimanyu の戦死を悲しむ遺族に対し Kṛṣṇa はいふ。

原

sa śokam jahi durdharṣa mā ca manyu-vaśam gamāḥ
śāstra-pūtām hi sa gatīm gataḥ para-puramjayaḥ (14.60.23)
されば悲しみをすてよ。情のままになること勿れ。蓋し彼は敵の保壘を破り、武器により淨められたる帰趣に達したれば。

世を捨てて森に退いた老王に Vyāsa はいふ。

gatāḥ te kṣatra-dharmaṇa śastra-pūtām gatīm śubhām
yathā dṛṣṭāḥ tvayā putrā yathākāma-vihāriṇāḥ (15.44.9)
汝親しく（わが幻術により）みし如く、武士道に則つて（死せる汝の）子らは、安らげく武器により淨められたる、淨き帰趣に到れり。

沐浴は精進潔斎のしるしであるが、武士の名誉の戦死は「武器による最終沐浴」といわれる。Kṛpa の進言を蹴つてあく迄戦場に散らんとする Duryodhana の言

śastrāvabhṛtham āptānām dhruvam vāsas triviṣṭape
mudā nūnam prapaśyanti śubhrā hy apsarasām gaṇāḥ (7.4.35)
武器に最終沐浴なしたる者の天界に住するは必定。今や美わしき天女の群は悦び（吾らを）迎う。

Vālin の屍によりすがる Tārā の嘆き。

iṣṭvā samgrāma-yajñena nānā-praharaṇāmbhasā
asminn avabhṛthe snātāḥ kathaṁ patnyā mayā vinā (4.23.27)
様々な飛道具を水となす合戦の祭祀を催し、汝何故に妾を置いてこの最終沐浴に沐浴し給う。

戦争は武士の祭式、淨め⁽¹⁸⁾、そこに吾々は武士が戦争によせた宗教的意味を看取する如くである。

II. 2.

上来屢々闡説した如く、戦場に命を顧みず勇敢に戦つて戦死した武士は天界に赴くといわれるが⁽¹⁹⁾、この戦死者の赴く世界は叙事詩に在つて様々に表出せられる。それは唯単に「天」(svarga)と単数に表出され (cf. 11.2.9, 11, 8.62.14, 9.18.6 etc.)⁽²⁰⁾ ていたのみではなく、複数に「諸世界」(lokāḥ, lokān)と称せられることもあり、更に「インドラの世界」「梵の世界」などと特殊化して単数に出る場合もある。以下にこれらを整理して順次検討していくであろう。

先づ彼らの到る世界 (loka, pl.) は唯単に「世界」(pl.)とのみいわれる。賭博に破れて王国を奪われ、敵のいうままに林棲に憂き身をやつす Bhīma は13年待たずとも挑戦して勝負を早く決め度いといふ。

tatra ced yudhyamānānām ajihmam anivartinām
sarvaśo hi vadhaḥ śreyān pretya lokāml labhemahi (3.34.17)

退却することなく堂々と戦つて討たれるともそはわが本懐。死して共々諸世界を享けん。

それは又「最高の世界」ともいわれる。Jaṭāyus を葬つて Rāma はいう。

yā gatir yajña-sīlānām āhitāgneś ca ya gatiḥ
aparāvartinām yā ca yā ca bhūmi-pradāyinām (R. 3.64.29)
mayā tvam̄ samanujñāto gaccha lokān anuttamān
gṛdhra-rāja mahāsattva sāṃskṛtaś ca mayā vraja (R. 3.64.30)

常に祭祀を行い、敬虔に火を供える人々の帰趣、戦に背をみせぬ勇士の帰趣、将又土地寄進者の帰趣、吾に葬られ、今辞去してこれら最上世界に赴くべし。

Indrajit の戦死を報ずる中にいわれる。

lakṣmaṇena hataḥ śuraḥ putras te vibudhendrajit (R. 6.92.3 cd.)
gataḥ sa paramāml lokān śaraiḥ saṃtarpya lakṣmaṇam (6.92.4 ab.)
御令息 Indrajit は Lakṣmaṇa の手にかかる。彼は敵将を矢もて満足せしめ最上の世界に赴き給えり。

それは又「最高の帰趣」ともいわれる。Abhimanyu 戦死し Kṛṣṇa

はその母を励ましていう。

vīra-sūr vīra-patnī tvam̄ vīra-śvaśura-bandhavā

mā śucas tanayaṇaṁ bhadre gataḥ sa paramāṁ gatim (7.54.17)

汝は武人の母、武人の妻、武人を親族にもつ女なれば、逝ける息子を悲しむ
勿れ。彼は実に最上の帰趣に赴けば。

さきに吾々は敵軍の攻勢に怯む将土に Duryodhana が叱咤激励して
「戦は天 (svarga) への捷径、死して（勇士自ら）獲得せる世界 (jitā-
mīl lokān) に赴け」(9.18.61) といつてゐたのをみたが、この jitāmīl
lokān なる表出はまた他にもみられる。Karṇa を慰め励まして Bhīṣma
はいいう。

aham tvāṁ anujānāmi yad icchasi tad āpnūhi

kṣatra-dharma-jitāmīl lokān samprāpsyasi na saṃśayah (6.117.31)

暇乞いなせ。汝の欲するところを得よ。汝は武士道によつて獲得せられた世
界に到らん。ここに疑あることなし。

この「武士道により獲ち得られたる世界」は又「武器によつて獲ち
得られたる世界」ともいわれる。親族一同案づる中に在つて Dhṛta-
rāṣṭra は潔く戦つて死んだ子らを悔まない。

na teṣu pratikartavyaṇa paśyāmi kurunandana

sarve ṣastra-jitāmīl lokān gatās te 'bhimukhaṇ hatāḥ (15.5.17)

彼らに対しなすべきことを吾さらに見ず。蓋し彼らは勇敢に戦つて斃れ、武
器により獲得せられたる世界に赴けば⁽²¹⁾。

因みに「武器によつて淨められたる帰趣」の表出は既に吾々のみた
所であつた (15.44.9)。

祭祀の執行は来世の福楽を約束するが、戦死者の世界は盛大な祭式、
「馬祠を行つて得られたる世界」ともいわれる。即ち戦死の功徳は盛
大な祭式執行のそれに匹敵していたのである。

go-brāhmaṇārthe vikrāntaḥ saṃgrāme nidhanam gataḥ

aśvamedha-jitāmīl lokān prāpnoti tridivālaye (13.128.52c-f.)

牛、バラモンの為に戦に命を投げ出した勇敢な勇士は、天に到つて馬祠によ
つて獲得せられし世界を享く。

この例によつて知られる如く、神々の在します天と、戦死者の赴く

複数の世界は区別せられていた。而してこれら 諸世界は神々によるも到達され難いものといわれる。

raṇājire yatra śarāgni-saṁstare nr̄pātmajo ghātam avāpya dahyate
prayāti lokān amaraiḥ sudurlabhān niṣevate svarga-phalam yathā-sukham
(12.286.3)

矢の火燃える戦の第一戦に刺されて焼かれる将土は神々によるも到達され難き世界に到り、天の果を思いのままに享受す。

上にみた「……獲得せられたる世界」と同様に 複数に出るものとして「善業者の世界」⁽²²⁾があり、戦死の功徳は 善業のそれと 等置せられる。

息子の戦死を悲しむ Arjuna を励まし Kṛṣṇa は言う。

dhruvam yuddhe hi maranam śūrāṇām anivartinām
gataḥ puṇyakṛtām lokān abhimanyur na saṁśayah (7.50.64)
不退転の勇士の戦に死するは 必定。Abhimanyu が善業者の 世界に 到りし事、疑なし。

Kṛṣṇa は又その母 Subhadrā を慰めていう。

jitvā subahuśah śatrūn preśayitvā ca mr̄tyave
gataḥ puṇya-kṛtām lokān sarva-kāma-duho 'kṣayān (7.54.15)
數多の敵を撃ち殺して後、彼は一切望みを叶え、不壞なる善業者の世界に到れり。

勇士は善業者の世界を目指して戦う。

yuddhe sukṛtinām lokān icchanto vasudhādhipāḥ
camūm vigāhya yudhyante nityam svarga-parāyanāḥ (6.79.10)
天を思い、善業者の世界を欲しつつ、敵軍の真只中に入つて将土は戦う。

それは又単に「善人の世界」⁽²³⁾ともいわれる。決死の覚悟で戦場に向う Duryodhana の言。

tyaktvā tu vividhān bhogān prāptānām paramāṇ gatim
apīdānīm suyuddhena gaccheyam sat-salokatām (9.4.33)
否むしろ諸々の享楽をすて、最高帰趣を究めたる人々の(趣くところ)、善人と共なる世界に、今や勇敢に戦つて赴かん。

戦死者の世界と善業者の 世界は並列して述べられる。孝子の瞑福を

祈る老苦行者の言。

apāpo 'si yathā putra nihataḥ pāpa-karmanā
 tena satyena gacchāśu ye lokāḥ śastra-yodhinām (34)
 yānti śūrā gatīm yām ca samgrāmeśv anivartināḥ
 hatāś tv abhimukhāḥ putra gatīm tām paramāṁ vraja (35)
 yām gatīm sagaraḥ śaibyo dilipo janamejayaḥ
 nahuśo dhundhumāraś ca prāptāś tām gaccha putraka (36)
 yā gatīḥ sarva-sādhūnām svādhyāyat tapasaś ca yā
 bhūmi-dasyāhitāgneś ca eka-patnī-vratasya ca (R. 2.58.37)

汝は罪なきに拘らず、悪業者に殺さる。この真実にかけて汝速かに、武人の
 獲る世界、戦場に不退転の勇士の死して赴く最高帰趣に赴くべし。古今の名
 君、名将の到れる帰趣に赴くべし。一切善人の学問・苦行により得る帰趣、
 土地寄進者、火を供うる者、一妻の誓果す者の帰趣に。

名誉の戦死を遂げた勇士のみならず、平時に在つて善政を布いた王
 も善人同世界を得る。

samyak praṇīya daṇḍam hi kāma-dveṣa-vivarjitāḥ
 alubdhā vigata-krodhāḥ satām yānti salokatām (3.149.52c-f.)
 愛憎を離れ、信賞必罰を旨とし、貪欲なく、怒なき王は善人同世界を享く。

これら複数に現われる世界⁽²⁴⁾を離れ、次に単数の世界を考察するに、
 先づ上来屢々闇説せられた「英雄の世界」がある。

kṣatriyāḥ kṣatrādharmeṇa vadhyante yadi samyuge
 viralokaṁ samāśadya sukham prāpsyanti kevalam (6.3.45)
 武士道に則つて戦の座に斃れなば、武士は英雄の世界に到り、只管幸せを享
 けん。

昇天した Yudhiṣṭhīra は宿敵 Duryodhana の天界に在るをみて憤
 慨するが、聖仙 Nārada は彼に説明してい。

vīra-loka-gatīm prāpto yuddhe hutvātmanas tanum
 yūyām sarve sura-samā yena yuddhe samāsitāḥ (14)
 sa eṣa kṣatra-dharmeṇa sthānam etad avāptavān
 bhaye mahati yo 'bhīto babhūva pr̄thivīpatil (18.1.15)
 神に等しき汝らが戦を交えし (Duryodhana は) 戦に己が身を供えて英雄の
 世界に到れり。大なる怖れを怖れとせざりし彼は武士道に則つて、この境涯

を到達せり。

猿軍を叱咤して Aṅgada はい、う。

avāpnuyāmaḥ kīrtim vā nihatvā śatrum āhave

nihatā vīra-lokasya bhokṣyāmo vasu vanarāḥ (R.6.66.25)

敵を討ち取つて名誉を得ん。然らずんば討たれて英雄の世界の幸を享受せん。

尚「英雄の切望せる帰趨」(vīrābhilaśitāṁ gatim, 7.54.15) の表出については既にみたところであつた。

これら武士道的な世界を離れれば、次に同じく 単数に出るものとして、より哲学的神話的な「梵」「インドラ」の世界が現われる。後述する如く「梵の世界」はこれら諸世界の最上とされるが、今は便宜上この「梵の世界」を先に取り上げることとする。

先づ梵の世界は卑劣な武士の到る所でない。

śayāmahe vā nihatāḥ pṛthivyām alpa-jīvitāḥ

prāpnuyāmo brahma-lokaṁ duṣprāpam ca kuyodhibhiḥ (R. 6.66.24)

所詮果かなき人生なれば討たれて大地に斃れ、小兵の到り難き梵界に到らん。

勇士は梵界を目指して決戦に臨む。

brahma-loka-parā bhūtvā prārthayanto jayam yudhi

suyuddhena parākrāntā narāḥ svargam abhīpsavāḥ (9.11.43)

bhartṛ-piṇḍa-vimokṣarthaṁ bhartṛ-kārya-viniścitalāḥ

svarga-saṃsakta-manaso yodhā yuyudhire tada (9.11.44)

梵界を目し、戦勝を求め、善戦する勇士は天を欲し、主家への禄の恩返しのため⁽²⁵⁾、主人のため思い、心を天に懸けその時戦えり。

負傷を物ともせず戦う勇士は梵界に到る。

chidyamānāḥ śitaiḥ śastraiḥ kṣatra-dharma-parāyaṇāḥ

gatās te brahma-sadanāṁ hatā vīrāḥ suvarcasāḥ (11.26.16)

鋭き武器に撃たれるも、武士道を先となす嚇々たる勇士は死して梵の境界に到る。

次下の章句はバラモンへの土地寄進の功徳を列挙しているが、この間にも戦死者は梵界に到るといわれる。

bhartur niḥśreyase yuktāḥ tyaktātmāno raṇe hatāḥ

brahma-loka-gatāḥ siddhā nātikrāmante bhūmi-dam (13.61.22)

bhartur niḥśreyase yuktās tyaktātmāno raṇe hatāḥ

brahma-loka-gatāḥ śūrā nātikrāmantī bhūmi-dam (13.61.55)

主君のためを思い、己が一命を顧みず戦場に死して梵界に達せる成就者も土地寄進者に及ばず……。

又 Bhīṣma の戦陣訓にもいわれる。

idam vah kṣatriyā dvāram svargāyapāvṛtam mahat

gacchadhvam tena śakrasya brahmaṇaś ca salokatām (6.17.8)

武士達よ、天国の大門は開かれたり。インドラの世界、将又梵界に赴くべし⁽²⁶⁾。

ここに「インドラの世界」といわれるが、概して名譽の戦死を遂げた者の赴く世界はインドラの世界とされるのが通例であつた。もトインドラは武勇神とされ、神界を統治し、武力に由つて宿敵 Vṛtra を殺し、Kṣattradharma に則つて神界の王位に即いたとう因縁が就中武士道との連関に於いて強調せられる⁽²⁷⁾。地上の王はインドラの四分の一とされ、斯くして人民を支配するといわれる⁽²⁸⁾。戦死者とインドラ界との関連を説く章句は夥しきに上るから今は一例を挙げるに留める。

sa saṃkhye nidhanam prāpya praśastam loka-pūjitam

svadharmaṁ vīpulaṁ prāpya śakrasyaiti salokatām (12.98.30)

sarvo yodhaḥ param tyaktum āviṣṭas tyakta-jīvitāḥ

prāpnnotindrasya sālokyam śūraḥ prṛṣṭham adaśayan (12.98.31)

戦場に世人の崇め貴ぶ戦死を遂げ、自己の本務を完遂して一切軍人はインドラ同世界を得。彼らは偏えに敵を討たんとて命を顧みず、敵に背をみせず、インドラ同世界を得。

yair hutāni śarīrāṇi hṛṣṭaiḥ parama-samyuge

deva-rāja-samāṇī lokān gatās te satya-vikramāḥ (11.26.12)

悦んで命を戦に供えし彼ら勇士は神の長に等しき世界に到れり。

ここに「世界」(loka) は複数に出ているが同じく複数の世界をインドラが戦死者のために用意するといわれる。

teṣāṁ kāma-dughāṇī lokān indraḥ samkalpayiṣyati

indrasyātithayo hy ete bhavanti puruṣarṣabha (11.2.10)

彼らのため、インドラは一切の望みを叶える世界を用意せん。蓋し彼らはイ

ドランの客人なれば。

斯くインドラは戦死者を客人として迎え 天に招じ入れるから、 戦争なく天下泰平の世に彼は手持無沙汰となる。Nārada と対話する Nala 王物語の一節。

東洋学報

nāradasya vacaḥ śrutvā papraccha bala-vṛtrahā
dharmajñāḥ pṛthivī-pālāḥ tyakta-jivita-yodhinaḥ (15)
śastreṇa nidhanam kāle ye gacchānty aparāṇ-mukhāḥ
ayām loko 'kṣayas teṣām yathāiva mama kāma-dhuk (16)
kva nu to kṣatriyāḥ śūrā nahi paśyāmi tān aham
āgacchato mahipālān athithin dayitān mama (3.51.17)

Nārada の言を聞きインドラは諷ねて曰く。道を弁え、命を顧みず勇敢に戦い時到つて戦死する勇士達、この（一切の）望みを叶えさす不壞の世界は我がものの如く彼らのものなり。されど今彼ら勇士は何処にありや。蓋し吾は吾が親愛なる客人として彼ら諸侯の来訪するを見ず。

このインドラの世界には Nandana と称せられる楽園があり、楽人天女群り侍るといわれるが、戦死者との関連に於いて就中天女(apsaras)が言及せられる⁽²⁹⁾。決死の覚悟をもつて戦に臨む Duryodhana の言。

śastrāvabhṛtham āptānām dhruvam vāsas triviṣṭape
mudā nūnam prapaśyanti śubhrā hy apsarasām gaṇāḥ (35)
paśyanti nūnam pitaraḥ pūjitān śakra-saṃsadi
apsarobhiḥ parivṛtān modamānāms triviṣṭape (9.4.36)

武器に最終沐浴したる者の天界に住むは必定。美わしき天女の群は今や悦び来迎す。今や祖靈は彼らが天界に在つてインドラの世界に崇められ、天女に侍かれるをみる。

祖靈のみならず 戦場の勇士も 天女が天車を駆つて来迎する様をみたといわれる。多数の戦死者を出した Yudhiṣṭhīra と Karṇa の激戦に次の如くいわれる。

tathā tu vitate vyomni nisvanaṁ śusruvur janāḥ
vimānair apsaraḥ-saṃghair gīta-vāditra-nisvanaiḥ (55)
hatān kṛttān abhimukhān vīrān vīraiḥ sahasraśāḥ
āropyaśāpya gacchānti vimāneś apsaro-gaṇāḥ (56)
tad dṛṣṭvā mahad āścaryaṁ pratyakṣam svarga-lipsayā

第五十一卷

四三六

prahṛṣṭa-manasaḥ śūrāḥ kṣipram jagmuḥ parasparam (8.33.57)

その時人々は天車を駆り音楽奏でる天女の群の天より遙か來迎する音を聞く。勇士との戦に傷つき斃れたる勇士を天女達は群り天車に乗せて次々に連れ去る。この摩訶不思議を目の辺り見て勇士は天を欲し、欣喜雀躍、急ぎ戦に馳せ参ぜり。

戦の第14日目は夜戦となるが、松火に照し出された戦場は天降る天の楽人・天女と昇天する戦死者往き交うといわれる。

tad deva-gandharva-samākulam ca yakṣāsurendrāpsarasām gaṇaiś ca hataiś ca vīrair divam āruhadbhīr āyodhanām divya-kalpām babhūva (7.138.31)

かの戦場は神、天の楽人、夜叉、阿修羅の長、天女の群、昇天せんとする戦死者勇士に混雜し、宛ら天上の如くなれり。

斯く戦死者が天女の来迎をうけ、天上で天女に侍かれるとあれば、夫を戦地に失つた婦女は夫を思つて天女に対し嫉妬に似た感情を催す。Abhimanyu 逝いて独り残された妻⁽³⁰⁾ Uttarā は尚生き永らえるを嘆じてい。

tava ṣastra-jitāmṛ lokān dharmeṇa ca damena ca kṣipram anvāgamiṣyāmi tatra māṁ pratipālaya (11.20.21)

durmaram punar aprāpte kāle bhavati kena cit yad ahaṁ tvāṁ rāṇe dṛṣṭvā hatan jivāmi durbhagā (11.20.22)

kām idānīṁ naravyāghra ślakṣṇayā smitayā girā

pitṛ-loke sametyānyām mām ivāmantraiṣyasi (11.20.23)

nūnam apsarasām svarge manāmṣi pramathisya

parameṇa ca rūpeṇa girā ca smita-pūrvayā (11.20.24)

prāpya puṇyakṛtāmṛ lokān apsaro bhiḥ sameyivān

saubhadra viharan kāle smarethāḥ sukṛtāni me (11.20.25)

卿は（武士の）道と克己により、武器によつて獲られし世界を享け給う。

妾又直ちに後を追わん。暫く猶予し給え。時到らざれば何人も死すること難く、卿の戦死し給うをみるも、幸薄き妾は尚生き永らえる。今父祖の世界にて優しく甘き言の葉を、妾にかけ給いし如く、別の女にかけ給うや。美わしき御姿と優しき言の葉にて今や卿は天に在つて天女の心を悩まし給うならん。善業者の世界に到り、天女とめぐり合い愉しみ給う間、時あつて妾の奉仕の数々を思い出し給え。

既述の如く戦死者の赴く世界は武士道を反映して「武器により獲られ、淨められたる世界」、又倫理的に「善業者の世界」、哲学的に「梵の世界」、神話的に「インドラの世界」などと称せられ、又天女群つて愉しむ世界とロマンティクにも表出されるが、次下の章句はこれらの世界に等級をつけていたものの如くである。

東洋学

報

yair hutāni śarīrāṇi hrṣṭaiḥ parama-saṃyuge
deva-rāja-samāṇi lokān gatās te satya-vikramāḥ (11.26.12)
ye tv ahṛṣṭena manasā martavyam iti bhārata
yudhyamānā hatāḥ saṃkhye te gandharvaiḥ samāgatāḥ (11.26.13)
ye tu saṃgrāma-bhūmiṣṭhā yācamānāḥ parāṇmukhāḥ
śastreṇa nidhanam prāptā gatās te guhyakān prati (11.26.14)
piḍyamānāḥ paraīr ye tu hiyamānā nirāyudhāḥ
hrīniṣedhā mahātmānāḥ parān abhimukhā rāṇe (11.26.15)
chidyamānāḥ śitaiḥ śastraiḥ kṣatrādharma-parāyanāḥ
gatās te brahma-sadānam hatā virāḥ suvarcasāḥ (11.26.16)

武勇の程を示して悦んで大戦に生命を供える者はインドラに等しき世界に到る。心ならずも死なねばならぬと觀念して戦つて戦場に斃れる者はガンドルヴァの世界に到る。されど戦場に在つて敵に背を向け命乞いなしつつ戦死したる者は Kubera 眷族の世界に到る。これに反して敵に撃たれ、甲冑扱わるとも、廉恥を重んじ⁽³¹⁾ 戰に身も挺し、武士道を旨とし、銳き武器に討たれたる嚇々たる勇士は死して梵界に到る。

斯くて梵界は戦死者の最高帰趣であり、廉恥を重んじ勇敢に戦つた武士のみ到達し得る世界であつた。インドラ界は武勇のみの勇士の赴くところ、Gandharva 界、Guhyuka の世界がこれに次いでいる⁽³²⁾。

聖者 Śarabhaṅga は自ら火に身を投じ梵界に到つたが、彼はその間に種々の天界を経由した。

sa lokān āhitāgnināṁ ṛṣīnāṁ ca mahātmanāṁ
devānāṁ ca vyatikramya brahma-lokām vyarohata (R. 3.4.35)

彼は火を供え(敬虔なる)、気高き聖仙の世界、神々の世界を超えて梵界に昇つた。

斯く梵界は諸聖仙の世界、神々の世界をこえてそれらの上に位した如くである。

第五十一卷
四三四

以上吾々は戦死者の赴く世界を論述したが、 戦死の功徳は更に再度地上に生れ替る次生に迄伸びている。文脈はもとよりバラモン扶養の功徳を説き、 従つて生活権擁護を目企むバラモンの手に成つたと思われる部分に位するが、 バラモンの為に生命を投げ出す武士は次生にバラモンに生れ替るといわれる。もと古代インドに在つて階級制度はバラモンを最高として武士、 王族はその下に位したが⁽³³⁾、 階級の上昇は人々の望む所であり、 就中バラモンに生れる事は至難の業とせられた⁽³⁴⁾。Viśvāmitra の物語にみる如く武士に生れてバラモンになる事は稀有であり、 而も激しい苦行に耐えて始めて可能であつた。次下に章句を列挙して戦死の功徳がひとり天に昇る事に留まらず、 それが就中バラモンのためであつた場合、 功徳は伸びて次生に及び、 絶大な果報を約していた事情を窺うこととする。

幾度びか再生しその度び毎に善業を行じ、 今や蛆虫より武士に迄漸次上昇し来つた Kīṭa に Vyāsa はいう。

itas tvam rāja-putratvād brāhmaṇyam samavāpsyasi
go-brāhmaṇa-kṛte prāṇān hutvātmyān raṇājire (13.119.21)
汝は王族なる故、 次はバラモンに生れん。バラモン・牛の為に戦に命を捨てれば⁽³⁵⁾。

Śiva と Umā の会話中にも階級上昇が述べられる。

go-brāhmaṇa-hitārthāya rane cābhimukho hataḥ
tretāgni-mantra-pūtam vā samāviṣya dvijo bhavet (13.131.43)
バラモン・牛のために勇敢に戦死なし、 Tretāgni の呪文に淨められれば、 彼はバラモンとならん。

バラモンの為に生命を捧げる者はひとり武士のみでなかつた。賤民 Caṇḍāla は斯くて解脱を得たといわれる。

caṇḍāla pratijānihi yena mokṣam avāpsyasi
brāhmaṇārthe tyajan prāṇān gatim iṣṭām avāpsyasi (13.104.26)
dattvā śarīram kravyādbhyo raṇāgnau dvija-hetukam
hutvā prāṇān pramokṣas te nānyathā mokṣam arhasi (13.104.27)
ity uktah sa tadā rājan brahma-svārthe paramtapa

hutvā rāṇa-mukhe prāṇān gatim iṣṭām avāpa ha (13.104.28)

汝誓うべし。よつて汝が解脱を得るために。バラモンの為に生命を捨てなば、願わしき帰趣に赴かん。バラモンの為に戦火の中に身体を食肉獸に与え、命を供えれば汝は解脱することを得ん。他に方途なし。斯くいわれて彼らはその時バラモンの財の為め、戦場に生命を捧げて願わしき帰趣に赴けり。

斯く戦死の功徳は昇天を超えて来世から更に次世に延び、就中バラモンの為に戦死することは次生にバラモンとなつて生れ替る事を約した⁽³⁶⁾。

II. 3.

斯く勇士は負傷を顧みず、勇しく戦場に散つて天界を享けるを旨としたが、ここで吾々は稍々視点を替え、「退却」「逃亡」を中心に武士道を見度いと考える。既にみたように戦場に「不退転」とは勇士の形容詞であり、又武士道を旨とする武士にとつては、戦場に殺すか殺されるか二つの内の何れかしかなく、第三の道は存在しなかつたが、この第三の道は敵に背を向けて退却し、戦場より逃亡することに他ならなかつた。退却は武人の恥、武士道に悖る所以とせられたが、以下にこの点を明示するであろう。

先づ四階級の義務を説く条に武士の務めの一に「戦闘に於いて逃げぬこと」が挙げられる。Bhagavadgītā 最終巻の一節。

śauryam tejo dhṛtir dākṣyam yuddhe cāpy apalāyanam
dānam iśvara-bhāvā ca kṣatra-karma svabhāvajam (6.40.43)

武勇、氣力、沈著冷静、巧さ、戦に於いて退却せぬこと、布施、王権、これらは武士に本来的な営みなり。

されば退却は武士道を捨てる事にほかならない。Bhīma の腕力に怖れ逃げる Kuru 軍を描写していゝ。

tasya śabdena vitrastāḥ prādravams tāvakā yudhi
kṣatra-dharmaṁ samutsṛjya palāyana-parāyanāḥ (7.165.66)

その音を聞いて汝の軍勢は怖れ戰き、武士道を捨てて一目散に逃走せり。

戦場に不退転とは又武士の誓であつた。聖仙のひきとめるにも拘らず、Bhīṣma は Rāma に挑戦せんとする。

nivartasva raṇāt tāta mānayasva dvijottamān
nety avocam aham tām ca kṣatra-dharma-vyapekṣayā (5.186.24)

mama vratam idam loke nāham yuddhāt katham cana
vimukho vinivarteyam pr̄sthato 'bhyāhataḥ śaraiḥ (5.186.25)
nāham lobhān na kārpaṇyān na bhayān nārtha-kāraṇāt
tyajeyam sāsvataṁ dharmam iti me niścītā matiḥ (5.186.26)

戦場より退け。バラモンを尊敬せよ（と彼らいうに）吾武士の道を思えば
「否」を答う。如何なることあろうとも戦に背を向け、背に矢を受けずとは
わが誓。貪欲より、憐愍より、恐怖より、又利害の故にこの（武士の）永遠
の道を吾捨てじと心に決めたれば。

されば退却は自らの誓を捨てることになる。味方の軍勢怯むをみて
Sātyaki はいう。

kva kṣatriyā yāsyatha naiṣa dharmaḥ satām purastāt kathitah purāṇaiḥ
mā svām pratijñām jahata pravīrāḥ svām vīra-dharmam paripālaya-
dhvam (6.55.79)

武人共よ、汝ら何処に赴かんとするか。こは先人の古来伝えし善人の道に非
ざ。自らの誓を捨てる勿れ。自ら勇士の道を守るべし。

退却・逃亡は又名誉をすて、体面を顧みぬに等しい。逃げる Dury-
odhana に Arjuna はいう。

vihāya kīrtim vipulam yaśāś ca yuddhāt parāvṛtya palāyase kim (16ab)
mogham tavedam bhuvī nāmadheyam duryodhanetiha kṛtam purastāt
na hiha duryodhanatā tavāsti palāyamānasya raṇam vihāya (4.60.18)
嚇々たる名誉、体面を捨て、戦を背に逃げるとは何事。……兼ねて音に聞く
Duryodhana（難攻不落）と世に知られし汝の名は空し。蓋し今ここに戦を
捨て逃げ行く汝に難攻不落なることなければ。

退却、逃亡は斯く武士の恥であつたから、池に逃げ隠れた Duryod-
hana に Yudhiṣṭhīra はその廉恥の情に訴えて決戦を乞う。

ayuddham avyavasthānam naiṣa dharmaḥ sanātanaḥ
anārya-juṣṭam asvargyam raṇe rājan palāyanam (9.30.22)
nedāniṁ jivite buddhiḥ kāryā dharma-cikīṣayā
kṣatra-dharmam apāśritya tvad-vidhena suyodhana (9.30.28)
tat pāpan sumahat kṛtvā pratiyudhyasva bhārata
katham hi tvad-vidho mohād rocayeta palāyanam (9.30.30)

kva te kṛtāstratā yātā kiṃ ca śeṣe jalāśaye

sa tvam uttiṣṭha yudhasva kṣatra-dharmeṇa bhārata (9.30.32)

戦わず、優柔不断なるは（武士の）永遠の道に非ず。戦場に在つて逃亡する如きは卑劣な人のなすところ、天に赴く所以に非ず。正しき道を履み行かんと欲しなば、卿の如きがこの期に到つて武士道を捨て命を惜しむ可からず。大罪を犯したれば（今吾を）迎え撃て。卿の如きが逃亡を好むとは迷妄の故か。汝の甲冑つけたる雄姿今いづこ。又何故に水中に身を隠すや。さればいざ立て。武士道に則り一戦を交えよ。

さきに吾々は勇士が死を以つて退却の場をなす（mr̥tyum kṛtvā nivartanam）といわれているのをみたが、退却・逃亡する位なら死がこれに勝る。Kuru 軍勢に投降して逃げ出す Uttara をみて女装の Arjuna (Bṛhannadā) はいう。

ity ukrtvā prādravat bhīto rathāt praskandya kuṇḍalī³⁷⁾
tyaktvā mānaṃ sa mandātmā visṛjya sāsaram dhanuh (4.36.25)

naiṣa pūrvaiḥ smṛto dharmah kṣatriyasya palāyanam
śreyas te maraṇam yuddhe na bhītasya palāyanam (4.36.26)

斯くいつて、車より飛び降り、この弱虫は恥も外聞も捨て、弓矢を捨てて逃亡せり。（Arjuna 曰く）逃亡は武士の道に非ず。古来先人の伝えぬところ。怯んで逃げるより戦死が勝る³⁷⁾。

されば勇士は退却の時到るも不動であつた。Ghaṭotkaca と Duryodhana の激戦に後者は、

kṣatra-dharmaṇ puraskṛtya ātmanaś cābhimānitām
prāpte 'pakramāṇe rājā tashau girir ivācalah (6.88.12)

武士道を先とし、己れを貴しとなし、かの王は退却の時到るも泰山の如く動かざりし。

退却・逃亡は命を惜しむ所以であつたから、「命を惜しむこと」も武士道に悖るとせられた。池に逃げた Duryodhana への Yudhiṣṭhira の嘲笑はさきにみた（9.30.28）如くであるが、命を惜しむ武士は盗人に等しいといわれる。腑甲斐なき息子を叱る母 Vidurā の言。

yo hi tejo yathā-śakti na darśayati vikramāt
ksatriyo jīvitākāṅkṣī stena ity eva tam viduh (5.132.2)

武勇に則つて力の限り気力を示さず、命を乞うる武士を人々は盗人と知る。

勇敢に戦つて戦死する者が天国を得るのに対して、命を惜しむ武士には怖い来世が待ち構えていた。全軍敗走するをみて Kr̥pa は Duryodhana に進言する。

vadhe caiva paro dharmas tathādharmaḥ palāyane
te sma ghorāṁ samāpannā jīvikāṁ jīvitārthinaḥ (9.3.11)

戦死に最高の功徳あり。敗走に功徳なし。命を惜しむ彼らは（将来）恐ろしき生き方なさん。

この怖しき生き方とは地国に墮ちる事に他ならない。

asantas tu nyavartanta vedebhya iva nāstikāḥ
narakaṁ bhajamānāḥ te pratyapadyanta kilbiṣam (7.76.4)

ヴェーダより無神論者背を向ける如く、宜からぬ輩は（戦に）背を向けたり。彼らは地国に到つて罰を受けたり⁽³⁸⁾。

斯く退却は武士の恥であつたが、この間の事情は Rāvaṇa の弟、巨大なる Kumbhakarṇa の出現に怖れ戦き、一目散に逃亡した猿軍將士をみて、廉恥の情に訴え、武士道を想い起させ、再度彼らの奮起を促す Aṅgada の呼びかけの中に、最もよく窺い得るもの如くである。この Rāmāyaṇa の一節は稍々長文に亘るので、本文中には唯和訳のみ提示するに留める。

自らの勇武、家柄を忘れ、無名の猿共の如く怖れ戦き、汝ら何処に赴かんとするや。いざひきかえせ。何故に命を惜しむ。かの羅刹は戦うに非ず。唯大なる（仮幻）威嚇のみ。この羅刹共の大なる（仮幻）威嚇現わるとも、吾ら勇武に由りそを擊たん。皆の者、いざひきかえせ⁽³⁹⁾。

Aṅgada は続けていう。

彼ら挫けたる猿共をみて Aṅgada 曰く。立て、いざ戦わん。（戦の庭に）ひきかえせ。挫ければ、この大地は汝らのものに非ず。皆の者、ひきかえせ。何故に命を惜しむ。勇なき者共よ、武器をすて命からがら帰る者を妻は笑わん。（女に笑われるは死よりも苦しき）一撃。誉高き名門に生を享け乍ら、無名の猿の如く怖れ戦き汝ら何処に赴かんとするか。怖れて勇武（の誉を）捨て逃亡するとは卑劣。兼ねて人々の前に汝らなしたる高言、大言壯語今いづこ。そは今空し。蔑すまれて命永らう卑怯者に世評聞かる。されば善人の履み行ける道に従うべし。怖れをすてよ。所詮果かなき命なれば、死して大地に臥し小兵の到り難き梵界に赴かん。然らずんば敵を戦に討ち名誉を得

ん。死しては英雄の世界の富を享受せん。Rāma と会しては Kumbhakarṇa 生きて帰らじ。赤子の手を捻る如、飛んで火に入る虫。(吾ら)逃亡して生き永らえんか、(Kumbhakarṇa) 孤軍奮闘して吾ら全軍破れることとなり、名譽もここに滅することとならん⁽⁴⁰⁾。

II. 4.

以上吾々は戦場に於ける武士の心得をみたが、これによつて知られる如く、武士道の精華は平時に於ける人民守護、秩序維持よりも、戦時の必死・必殺の誓によりよく發揮される如くである。

即ち武士は常に武器と共に在り、戦争をその生甲斐とした。戦争は彼らの身体罪障を滅する道、敵を制するか、敵に撃たれるか、その何れを選ぶも彼らに幸せを約束した。彼らは戦に勝てば大地を得、死すれば天界を享ける。されば將士は必死・必殺の覚悟で戦に臨み、負傷を物ともせず、命を賭けて勇敢に戦い、矢を枕にして英雄の床に臥すべきであつた。戦死者は死して天の楽園に遊び、地に名を留める。従つて戦に背を向けて敗走する如きは武士の恥、家名を汚し、地国へ到る道と称せられる。最後に武士道の精華、戦陣訓を要約するべく、次下に二章句を援用して本論のしめくくりとする。

大戦の勃発を目前にして Kuru 軍の総帥 Bhīṣma は將士を集め、全軍に布告していく。

idam vaḥ kṣatriyā dvāraṁ svargāyāpavṛtaṁ mahat
gacchadhvam tena śakrasya brahmaṇaś ca salokatām (6.17.8)
eṣa vaḥ śāśvataḥ panthāḥ pūrvaiḥ pūrvatarair gataḥ
saṁbhāvayata cātmānam avyagra-manaso yudhi (6.17.9)

nābhāgo hi yayātiś ca māndhātā nahuṣo nṛgaḥ
saṁsiddhāḥ paramāṁ sthānam gataḥ karmabhir iḍrśaiḥ (6.17.10)
adharmaḥ kṣatriyasyaīśa yad vyādhi-maranaṁ gṛhe
yad ājau nidhanam yāti so'sya dharmaḥ sanātanāḥ (6.17.11)

武士達よ、天国の大門は開かれたり。インドラの世界、将又梵の世界に赴くべし。そは實に先人の踏み行ける永遠の道。矜持を持して戦に専念せよ。往時の名将 Yayāti も、Māndhātṛ も、Nahuṣa も将又 Nṛga もこの分け前に

あづかれり。彼ら吾らと同じきこの所業により道を完うして最高の境地に赴けり。家に在つて病床に死するは武士の道に非ず。この戦場に斃るること（武士の）永遠の道なれば⁽⁴¹⁾。

敵軍中に親族・長上の居並ぶとみて戦意挫ける Arjuna に諭して Kṛṣṇa はいいう。

svadharmam api cāvekṣya na vikampitum arhasi
dharmyādd hi yuddhāc chreyo 'nyat kṣatriyasya na vidyate (6.24.31)
yadṛcchayā copapannam svarga-dvāram apāvṛtam
sukhinaḥ kṣatriyāḥ pārtha labhante yuddham idṛśam (6.24.32)
atha cet tvam imaṁ dharmyaṁ samgrāmaṁ na kariṣyasi
tataḥ svadharmam kirtim ca hitvā pāpam avāpsyasi (6.24.33)

（武士の）本務に思いを致せ。怯む可からず。聖戦より卓れしもの武士にとつてあることなし。千載一遇の好機到り、今や天国の門は開かれたり。斯る戦争に相い違う武人は幸なる哉。汝若しこの聖戦に従事せざれば、自己の本務と名誉を捨て、罪を得ることとならん*。（東京大学文学部助教授）

註 II

- (1) sarveśām eṣā vai panthāḥ śūrāṇām anivartinām
kṣatriyāṇām višeṣeṇa yeśāṁ yuddhena jīvikā (7.50.62)
viditāḥ kṣatra-dharmāḥ te yeśāṁ yuddhena jīvikā
yathā pravṛttto nṛpatir nādhibandhena yujyate (14.2.16)
- (2) kṣatra-dharmam puraskṛtya gataḥ śūraḥ satāṁ gatim
yām vayam prāpnuyāmeha ye cānye śastra-jīvināḥ (7.54.21)
- (3) kṣatradharmaḥ mahāraudraḥ śastra-nitya iti smṛtaḥ
vadhaś ca bharata-sreṣṭha kāle śastrena samyuge (12.22.5)
尚この種の合成語後分としての nitya については M. Hara, "A Note on the Sanskrit Word *nitya* (2)," New Delhi(in press).
- (4) śṛṇu rājan yathāvṛttam samgrāmaṁ bruvato mama
vīraṇām śatrubhiḥ sārdham deha-pāpma-praṇāsanam (8.12.2)
kacākaci babhau yuddham dantādanti nakhā-nakhi
muṣṭi-yuddham niyuddham ca deha-pāpma-viṇāsanam (8.33.60)
又「身体」「罪障」の間に「生命」(asu) も枚挙せられる。
- (5) teśām ca pārthasya mahat tad āśid dehāsu-pāpma-kṣapaṇam suyuddham
trailokya-hetor asurair yathāśid devasya viṣṇor jayatām varasya (8.55.5)
- (6) tad alaṁ śokam ālambya krodham ālamba bhūpate

niśceṣṭāḥ kṣatriyā mandāḥ sarve caṇḍasya bibhyati (R. 6.2.19)

(6) Cf. Hopkins p. 199, MBh. 8.160.43 (但し Poona Ed. にはなし)。

(7) この二者择一何れも可なりとは彼ら武士達の敢て奇 (citra) とするに足らない
い大前提であつた。 東洋

jayo vāpi vadho vāpi yudhyamānasya sampyuge

bhavet kim atra citram vai yudhyadhvam sarvato-mukhāḥ (8.2.9) 学

(8) tathāpi tu nayañena jayam ākāñkṣatā rane 報

ātmā rakṣyah prayatnena yuddha-siddhir hi cañcalā (R.5.44.14)

durjñeyāḥ kārya-gatayo brūta yasya yathāmati

mānuṣāḥ no bhayaṁ nāsti tathāpi tu vimṝṣyatām (R.6.12.22)

sampyāś ca jaye nityaṁ rākṣasaś ca sudurjayaḥ

sa nivṝtto guror vākyān maruttaḥ pṛthivī-patiḥ (R. 7.18.17)

(9) 勇士は死を計算に入れぬといわれる。

vikrāntāś cāpi sūrāś ca na mṛtyum gaṇayanti ca

kṛta-yatnā vipannāś ca jivayaitān puram̄dara (R. 6.120.7)

mat-priyeṣ abhiraktāś ca na mṛtyum gaṇayanti ye

tvat-prasādāt sameyus te varam etam aham vṛṇe (R. 6.120.8)

(10) 同種の川の比喩は「若きは二度と帰らない」という諺にも用いられる。

idam te cāru samjātam yauvanam vyativartate

yad atītam punar naiti srotaḥ śīghram apām iva (R. 5.18.12)

cf. vayasaḥ patamānasya srotaso vānivartinaḥ

ātmā sukhe niyuktavyaḥ sukh-a-bhājaḥ prajāḥ smṛtāḥ (R.2.98.30)

(11) cf. Hopkins, p. 226, note (承前)

(12) yudhyasva yatnam āsthāya mṛtyum kṛtvā nivartanam

yatatas tava teṣāṁ ca daivam mārgenā yāsyati (7.127.20)

pārṣatas tu bali rājan kṛtāstraḥ kṛta-niśramaḥ

drauṇim evābhidudrāva kṛtvā mṛtyum nivartanam (7.171.39)

tato dundubhi-ghoṣeṇa bherīṇām ninadena ca

bāṇa-śabdaiś ca vividhair garjitaś ca tarasvinām

niryayus tāvakā yuddhe mṛtyum kṛtvā nivartanam (8.26.32)

atha samśaptakāḥ pārtham abhyadhāvan vadhaiṣiṇāḥ

vijaye kṛta-samkalpā mṛtyum kṛtvā nivartanam (8.32.8)

śinpha-nāda-ravāś cātra prādūr āsan samāgame

ubhayayoḥ senayo rājan mṛtyum kṛtvā nivartanam (8.41.7)

. tathā karṇam samāśadya tāvakā bharatarṣabha

samāśvastāḥ sthitā rājan samprahṛṣṭāḥ parasparam

samājagmuś ca yuddhāya mṛtyum kṛtvā nivartanam (8.55.73)
 pāñcalāpi maheśvasā bhagnā bhagnā narottamāḥ
 nyavartanta yathā śūrā mṛtyum kṛtvā nivartanam (8.56.47)
 tato balāni sarvāṇi senāśiṣṭāni bhārata
 samnaddhāny eva dadṛśur mṛtyum kṛtvā nivartanam (9.7.5)
 madrarājam tu samare dṛṣṭvā yuddhāya viṣṭhitam
 kuravaḥ saṃnyavartanta mṛtyum kṛtvā nivartanam (9.9.7)
 tataḥ pravavṛte yuddham bhīrūṇām bhaya-vardhanam
 tāvakānām pareśām ca mṛtyum kṛtvā nivartanam (9.9.57)
 labdha-lakṣāḥ pare rājan rakṣitāś ca mahātmanā
 ayodhayamis tava balam mṛtyum kṛtvā nivartanam (9.10.8)
 tataḥ pravavṛte yuddham kurūṇām pāṇḍavaiḥ saha
 nivṛttānām mahārāja mṛtyum kṛtvā nivartanam (9.20.4)
 evam uktas tu te rājñā saubalasya padānugāḥ
 pāṇḍavān abhyavartanta mṛtyum kṛtvā nivartanam (9.27.21)
 この他「心に生命を捨てて」(=死を覚悟して)の表出もみられる。
 tato rājan mahābāhur bhīmasenaḥ pratāpavān
 saṃtyajya manasā prāṇān madrādhipam ayodhayat (9.12.29)
 Milman Parry の敍事詩に於ける口伝的要素の研究中 System に相当すべきものとして次の章句は参照さるべきである。
 tataḥ saṃśaptakā bhūyah parivavrur dhananjayam
 martavyam iti niścīya jayaṁ vāpi nivartanam (8.37.37)
 cf. M. Parry, *L'Épithète traditionnelle dans Homère* pp. 11-15, et
 passim. (Paris, 1928), A. B. Lord, *The Singer of Tales* p. 35, (Cambridge, Mass., 1960).
 「鞍に不退転」(anivartin) とは勇士への形容詞であつた。例えば,
 vikrāntasyāryā-śilasya saṃyugeṣv anivartinaḥ
 snuṣā daśarathasyaisā jyeṣṭhā rājño yaśasvinī (R. 5.14.17)
 viryotsiktaśya śūrasya saṃgrāmeṣv anivartinaḥ
 balino vīrya-yuktasya bhāryātvam kiṁ na lipsyase (R. 5.21.11)
 tadāśit tumulaṁ yuddham yama-rākṣasayor dvayoh
 jayam ākāṅksator vīra samare 'py anivartinoḥ (R. 7.22.16)
 tato yuddham samabhavat surāṇām saha rākṣasaiḥ
 kruddhānām rakṣasām kirtim samareṣv anivartinām (R. 7.27.37)
 又「勝たずば帰らじ」との表出もみられる。例えば,
 yadā vrajati saṃgrāmaṁ grāmārthe nagarasya vā

gatvā saumitra-sahito nāvijitya nivartate (R. 2.2.24)
 ratham̄ śighram imam̄ sūta rāghavābhimukham̄ naya
 nāhatvā samare śatrūn nivartisayati rāvaṇah̄ (R. 6.104.25)

- (13) 武士にとって名誉 (kīrti) は生命より大切であった。例えば 3.284.31 ff.
 vṛnomi kīrtim̄ loke hi jīvitēnāpi bhānuman̄
 kīrtimān̄ aśnute svargam̄ hīna-kīrtis tu naśyati (3.284.31)
 kīrtir hi puruṣam̄ loke saṃjīvayati mātṛvat̄
 akīrtir jīvitam̄ hanti jīvato pi śarīriṇah̄ (3.284.32)
 cf. Hopkins, p. 189.

- (14) cf. Hopkins, pp. 187, 188, note 1, 193.

S. D. Singh, *Ancient Indian Warfare with special Reference to the Vedic Period*, p. 164 (Leiden, 1965)

B. K. Majumdar, *The Military System of Ancient India*, p. 28 (Calcutta, 1955)

又武士が家に在つて死んだ場合の葬式法については Hopkins, p. 104, note 2

- (15) bho bho paśyata me vīram̄ pitaram̄ brāhmaṇā bhuvi
 śayānam̄ vīra-śayane mayā putreṇa pātitam (14.80.8)
 tau vīra-śayane vīrau śayānau rudhirokṣitau
 śara-veṣṭita-sarvāṅgāv ārtau parama-pīḍitau (R. 6.45.19)
 sa vīra-śayane śīṣye vijyam āvidhya kārmukam
 bhinna-muṣṭi-parīṇāham̄ trinatam rukma-bhūṣitam (R. 6.45.24)
 baddhau tu tau vīra-śaye śayānau te vānarāḥ saṃparivārya tasthuḥ
 (R. 6.45.28ab)
 tau vīra-śayane vīrau śayānau manda-ceṣṭitau
 yūthapaiḥ svaiḥ parivṛttau bāṣpa-vyākula-locanaiḥ (R. 6.46.6)

- (16) akarot sa tataḥ kālam̄ śara-talpa-gato munih̄
 ayanam̄ dakṣinam̄ hitvā saṃprāpte cottarāyaṇe (14.59.12)
 aceṣṭau manda-nihsvāsau śopitenā pariplutau
 śara-jālācitau stabdhau śayānau śara-talpagau (R. 6.46.4)
 tataḥ sitā dadarśobhau śayānau śara-talpagau
 lakṣmaṇam̄ caiva rāmaṇam̄ ca visamjñau śara-pīḍitau (R. 6.47.18)
 śara-talpa-gatau vīrau tathābhūtau nararṣabhaū
 duḥkhārtā karuṇam̄ sitā subhṛṣṭam̄ vilalāpa ha (R. 6.47.21)
 dhiṁ mām̄ duṣkṛta-karmāṇam̄ anāryam̄ mat-kṛte hy asau
 lakṣmaṇah̄ pātitāḥ sēte śara-talpe gatāsuvat̄ (R. 6.49.12)
 yenādyā bahavo yuddhe nihatā rākṣasāḥ kṣitau

tasyām evādya śūras tvam śeṣe vinihataḥ śaraiḥ (R. 6.49.14)
śayānah śara-talpe 'smīn saśonita-parisrataḥ

śara-bhūtas tato bhāsi bhāskaro 'stam iva vrajan (R. 6.49.15)

śara-jälācītā vīrāv ubhau daśarathātmajau

śara-talpe mahātmānau śayānau rudhirokṣitau (R. 6.50.3)

- (17) この他「勇士の床」(śūra-śayana) の表出もみられる。

idam tac chūra-śayanam yatra śeṣe hato yudhi

śāyitā nihatā yatra tvayaiva ripavāḥ purā (R. 4.23.6)

又 śarāsana, śara-stamba-maya の表出もあり。

vidhvasta-kavacau vīrau vipraviddha-śarāsanau

sāyākaiś chinna-sarvāṅgau śara-stambamayau kṣitau (R. 6.47.19)

- (18) 戦を祭祀 (yajña) となす例は他所にもみられる。Jarāsandha に挑戦する Kṛṣṇa の言。

ko hi jānann abhijanam ātmanah kṣatriyo nṛpa

nāviśet svargam atulam raṇānataram avyayam (14)

svargam hy eva samāsthāya raṇa-yajñeṣu dīkṣitāḥ

yajante kṣatriyā lokāms tad viddhi magadhādhipa (2.20.15)

Bhīṣma の訓戒。

brāhmaṇārthe samutpanne yo 'bhiniḥṣṭya yudhyate

ātmanam yūpam ucchritya sa yajño 'nantadakṣiṇah (12.98.10)

又 dīkṣita については

pāñcālāḥ kuravaś caiva yodhayantāḥ parasparam

yama-rāṣṭrāya mahate para-lokāya dīkṣitāḥ (7.128.2)

- (19) 武士のみならず śūdra も従軍して戦死すれば天界を得るといわれる。cf. Hopkins, p. 185.

- (20) hatāḥ te kṣatra-dharmena jñātayas tava pārthiva

svargatāś ca mahātmāno vīrāḥ kṣatriya-pumgavāḥ (12.39.48)

yuktam hi yaśasā kṣatram svargam prāptum asamśayam

na hi kaś cana śurāṇām nihato 'tra parāṇmukhaḥ (14.2.7)

svadharmasya ca samyogāj jitas tena mahātmanā

svargaḥ parigṛhītaḥ ca prāṇān aparirakṣitā (R. 4.24.10)

hatāṇām gacchatām svargaḥ yudhyatām atha dhāvatām

prekṣatām ṣṭi-saṅghāṇām babhūva na tad antaram (R. 7.14.19)

又単に dyaus ともいわれる。

droṇa-karṇa-prabhṛtayo yena pratīsamāsitāḥ

raṇe mahendra-pratimāḥ sa kathaḥ nāpnuyād divam (14.60.22)

- (21) tavaśastra-jitāmpl lokān dharmeṇa ca damena ca
kṣipram anvāgamiṣyāmi tatra māṁ pratipālaya (11.20.21)
- (22) jitvā subahuśah śatrūn preṣayitvā ca mṛtyave
gataḥ puṇya-kṛtām lokān sarva-kāma-duho 'kṣayān (7.54.15)
prāpya puṇya-kṛtām lokān apsarobhiḥ sameiyivān
saubhadra viharan kāle smarethāḥ sukṛtāni me (11.20.25)
- (23) tapasā brahma-caryeṇa śrutena prajñayāpi ca
santo yām gatim icchanti prāptas tām tava putrakah (7.54.16)
kṣatradharmaṇi puraskṛtya gataḥ śurāḥ satām gatim
yām vayam prāpnuyāmahe ye cānye śastra-jīvināḥ (7.54.21)
- (24) この他複数に出来るものとして苦行を行つた苦行者の到る世界も勇敢な武士の
赴く所であつた。
- tapas taptvā tu yāmpl lokān prāpnuvanti tapasvināḥ
kṣatra-dharmāśritāḥ śurāḥ kṣatriyāḥ prāpnuvanti tān (7.52.32)
- (25) jahi śatru-camūm vīra darśayādyā parākramam
bhartṛ-piṇḍasya kālo yam nirveṣṭum sādhu yudhyatām (6.97.5)
臣下と主君の関係、就中「忠義」の概念は MBh. には殆んど出ないが、R.
には猿が Rāma のために戦うから、屢々散見する。この問題と「殉死」の概
念については将来稿を改める機会があるであろう。
- (26) ye raṇāgre mahipālāḥ śurāḥ samiti-śobhanāḥ
vadhyante 'bhimukhāḥ śakra brahma-lokaṁ vrajanti te (13.61.82)
- (27) indro vai brahmaṇaḥ putraḥ karmanā kṣatriyo 'bhavat
jñātinām pāpa-vṛttinām jaghāna navatīr nava (12.22.11)
tac cāsyā karma pūjyam hi praśasyan ca viśām pate
tena cendratvam āpede devānām iti naḥ śutam (12.22.12)
- (28) indrasyaiva catur-bhāgaḥ prajā rakṣati rāghava
rājā tasmād varān bhogān bhuṅkte loka-namaskṛtaḥ (R. 3.1.18)
- (29) yābhir gr̥hītaḥ puruṣaḥ sonmāda iva lakṣyate
āgur viṁśati-sāhasrā nandanād apsaro-gaṇāḥ (R. 2.85.42)
- (30) 武人の妻は寡婦となる可能性が大であるから賢者は娘を武人に嫁がせぬとい
われる。
- śūrāya na pradātavyā kanyā khalu vipaścītā
śūra-bhāryām hatām paśya sadyo māṁ vidhvām kṛtām (R. 4.23.8)
- (31) hrī-niṣedha (廉恥を重んじ) の表出は他所にもみられる。Rāma を記述し
て、
padma-patrekṣaṇaḥ śyāmaḥ śrīmān nirudaro mahān

東
洋
学
報

第五十一卷

四二二

- dharmajñah satya-vādī ca hriniśedho jitendriyah (3.15.29)
- (32) 同種の分類は家来についてもいわれる。
- yo hi bhṛtyo niyuktaḥ san bhartrā karmaṇi duṣkare
kuryāt tad anurāgeṇa tam āhuḥ puruṣottamam (R.6.1.7)
- yo niyuktaḥ param kāryam na kuryān nrpateḥ priyam
bhṛtyo yuktaḥ samarthaś ca tam āhur madhyamaṇi naram (R. 6.1.8)
- niyukto nrpateḥ kāryam na kuryād yaḥ samāhitāḥ
bhṛtyo yuktaḥ samarthaś ca tam āhuḥ puruṣādhamam (R. 6.1.9)
- (33) na tvam mūḍha vijāniṣe brāhmaṇaṇi kṣatriyād varam
sahito brāhmaṇeneha kṣatriyo rakṣati prajāḥ (13.137.12)
- (34) bhagavad-vacanāt kiṭo brāhmaṇyaṇi prāpya durlabham
akarot pṛthivīm rājan yajña-yüpa-satāñkitām
tataḥ sālokyam agamad brahmaṇo brahma-vittamah (13.120.12)
- (35) ātmavān bhava suprītaḥ svadharma-caraṇe rataḥ
ksātrīm tanum samutṛṣṭya tato vipratvam eṣyasi (13.120.5)
- (36) 但し彼らパラモンの為に戦死せる武士は唯單に天界を得るともいわれる。
samyang-danḍe sthitir dharmo dharmo veda-kratu-kriyāḥ
vyavahāra-sthitir dharmāḥ satya-vākyā-ratis tathā (13.128.51)
ārta-hasta-prado rājā pretya ceha mahīyate
go-brāhmaṇārthe vikrāntāḥ samgrāme nidhanam gataḥ
aśvamedha-jitāṁl lokān prāpnoti tridivālaye (13.128.52)
- (37) cf. Hopkins, p. 186. note 7.
- (38) cf. Hopkins, p. 226, note (承前)
- (39) ātmanas tāni vismṛtya vīryāṇi abhijanāni ca
kva gacchata bhaya-trastāḥ prākṛtā harayo yathā (R. 6.66.5)
sādhu saumyā nivartadhvam kim prāṇān parirakṣatha
nālām yuddhāya vai rakṣo mahatiyāṇi vibhiṣikā (6.66.6)
mahatām utthitām enām rākṣasānām vibhiṣikām
vikramād vidhamiṣyāmo nivartadhvam plavam̄gamāḥ (6.66.7)
- (40) tān samikṣyāṅgadō bhagnān vānarān idam abravīt
avatiṣṭhata yudhyāmo nivartadhvam plavam̄gamāḥ (R. 6.66.18)
bhagnānām vo na paśyāmi parikramya mahim imām
sthānaṇi sarve nivartadhvam kim prāṇān parirakṣatha (6.66.19)
nirāyudhānām kramatām asaṅga-gati-pauruṣāḥ
dārā hy upahasiṣyanti sa vai ghātāḥ sujivatām (6.66.20)
kuleṣu jātāḥ sarve 'smiṇ vistīrṇeṣu mahatsu ca

kva gacchata bhaya-trastāḥ prākṛtā harayo yathā
anāryāḥ khalu yad bhītāḥ tyaktvā vīryam pradhāvata (6.66.21)
vikatthanāni vo yāni bhavadbhīr jana-saṃsadi
tāni vaḥ kva nu yātāni sodagrāṇī hatāni ca (6.66.22)
bhīroḥ pravādāḥ śrūyante yas tu jīvati dhik kṛtaḥ
mārgaḥ sat-puruṣair juṣṭāḥ sevyatāṁ tyajyatāṁ bhayam (6.66.23)
śayāmahe vā nihatāḥ pṛthivyāṁ alpa-jīvitāḥ
prāpnuyāmo brahma-lokaṁ duṣprāpaṇ ca kuyodhibhiḥ (6.66.24)
avāpnuyāmaḥ kīrtiḥ vā nihatvā śatrum āhave
nihatā vira-lokasya bhokṣyāmo vasu vānarāḥ (6.66.25)
na kumbhaharṇāḥ kākutsthāḥ dṛṣṭvā jīvan gamiṣyati
dīvyamānam ivāśādyā pataṅgo jvalanam yathā (6.66.26)
palāyanena coddiṣṭāḥ prāṇān rakṣāmahe vayam
ekena bahavo bhagnā yaśonāśaṇ gamiṣyati (6.66.27)

41) cf. Hopkins, p. 206.

* 尚この他、戦没者遺族、戦争倫理（例えれば戦中の敵、投降者撃つべからず、臍より下部に飛道具放つべからず、etc., etc.）雪辱、仇討等の関連に於いて kṣatradharma が語られるが、これらの点については将来別に論ずる機会があるであろう。

東洋学報

第五十一卷

四二〇